

## 一 中国書道を濾過した作品

弘法大師の入唐というのは、実に多彩なもので、日本の留学僧でこのくらい幅の広い研究を持ち帰った人はないだろう。

その主体となつてゐるものはもちろん真言密教であるとしても、この篤い信仰の普及に伴つて展開されたいわゆる密教芸術の規模・意匠は奔放雄大であり、またすこぶる斬新であつた。

大師の宗教以外の学問・芸術その他が、その広い各分野にわたつて、ことごとく真言世界観の顕現でないものはないのだから、おそらくは書もまたこの外のものであらう筈はない。

私どもは大師ご自身の手をもつて作られたものうちで、大師が最も心を傾けておられたものは、書作品ではなかつたかと思つてゐる。なんびとの手も借りず、その独自の意図を思うままに、しかも極めて端的に表現される点で、これ以上のものはないのではなからうか。奈良に留学時代研鑽の素地をもつて、それこそ燃えるような意欲をいだき、当時憧れの学問・宗教・芸術の本場、中国、長安の土を踏まれた大師は、あの英邁な眼をかがやかせて、宗教以外のあらゆるものを把握されたであらう。

そのうちでも大師の眼に映じ、大師が特に注目したと考えられる中唐の書壇の大勢とはどんなものであつたらうか。大師入唐の約五十年前、建国以来百余年、唐帝国は絢爛たる文化の盛況にあつて、六世玄宗皇帝のような学問・芸術を好まれた治世は、また一段の新生面を開き、あらゆるものが確固たる伝統を保ちながら、一面その沈滞を破つて新鮮活潑な流動性を持ち、西域各国の影響も大きく受けとりながら、唐王朝三百年中最大の文化の曲り角に差しかかつてゐた。

中国の書道は、隋・唐の辺で東晋の王羲之系の書風を正統とする觀念が確立し、唐の二世太宗皇帝以後、この書風が貴冑(身分の高い)の間を風靡し來つたが、東晋からすでに三百五十年、その温健な書風もしばらく型として熟してくると、さらにこの王羲之時代より溯つた上代の

篆書とか隸書とかの筆法にかへつて新鮮さを感じ、唐代三百年の間ただひとりといわれる篆書の大家李陽冰が出たり、玄宗皇帝も帝みずから經書一群の碑を、当時忘れかけていた漢代隸書の筆法で書き示されるとなると、復古革新の眼は朝野に拡がつてきた。後に史上有名な安・史の大亂を鎮定して、あやや傾覆の運命にあつた唐帝国を救つた大忠臣、顏真卿將軍などは、篆書の法を応用して楷書を書き、伝統の行草にも多少の応用を加えて新風を開き、中国正統書法ここに亡びた——という歎が聞かれるくらいの活況を呈し始めると、既往の行草筆法の情性を打破して、在野の文人・僧門の人々などは、連綿して数字一連の草書などを作り出すという状勢となり、これが狂草と呼ばれて一世の注目を浴び、杜甫・李白のような大詩人たちがこれを謳歌した詩や序など作る、となると書の鑑賞分野は空前の広さ新しさをもち、ここに記録性以外の芸術のためのみの書の存在さえも認められてくるようになったのである。

またこれよりさらに半世紀ほどさかのほつて、三世高宗皇帝の皇后、則天武后治世の時代に建碑された道教系の「昇仙太子之碑」などには、文字にまで新たな創作が見られ、かつその題字の書などは西域仏教圏の影響もある飛白体というリボンをつなげたような新意匠の書が刻されたものなどあつて、伝統書道としての東晋書風は、記録・學術・書翰等の実用文字と見られ、上述のような視覚の芸術を強調した鑑賞書道が成立し、型よりも個性が主張され、一時の興趣を表現することも自由なほどの書壇の趨勢となつてゐた。

大師の留学は、実にこの潑刺たる新書道の展開がしばらく定着するかに見えるころであつた。特段の書道愛好であつたと推察される天才的大師が、この環境に學んで何を、何を感ぜられたかは、想像にあまりあるくらいで、帰朝以後の大師の書作品が、実に遺憾なくその成果を露呈してゐるのである。

しかもその帰朝以後の作品にあるものは、すなわち彼地に看得したもののまる写しではなく、実に大師を濾過して、大師の世界觀の象徴として、適時適所に応用表現されてゐるのである。(つづく)

『大法輪』昭和四十八年三月

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。